

## 上京前と上京後 水野仙子

私の處女時代なんてことを回想しなければならぬ程私はまだ古女房でもない積りでしたのに、それでももう結婚して三年になります。この九月で丸二年になる譯なのです。殊更にかう月日を繰つてみると擦つた

水野 仙子



いような氣がいたしますね、それだけ私はまだ家庭といふものに昵んで居ないのでせう。とんとかう自分達の日常生活を、家庭といふよりも單に男と女の共同生活のやうな風に考へて居ますからね、だから傍から普通の家庭取扱ひにされるのを最も

怖れて居ます。それだけ自由を縛られるやうな氣がいたしますもの。

こんな風で私は處女時代と今とあんまり違はない積りで自分は居ります。奥さんになると丸つきり體つきなどがそれは驚くほど變つてしまふ人がよくありますが——それが當り前かも知れませんが——私にはそれも著しくないやうに思はれます。もとから年よりも若く見られるせいから此間なども出入りの魚屋が、『川浪さんの奥さんには旦那様がおあんなさるんですか?』と近所の奥さんに聞いたとかで大笑ひしました。

それでも昔の——つまり處女時代の寫眞なぞを出して見るとつくづく今の姿や顔が厭になつてしまひますどつか洗練されて來た代りには、生のまゝつていふやうなところはなくなつてますもの、その時分なんだか大人びて撮れたと思つて厭がつたものでも、今になつて見ると、田舎娘が如何にもなんにも知らなさうな罪のない顔をして、その寫眞の前にお蜜柑でも供へたくなりました。自分つていふよりも自分の妹でも見るや

うな感じがします。

處女時代といつても、一年毎に思想なり肉體なりが變つて行くことですから、細かに回想して行つたらいろく面白發見もあるでせうけれど、私はまだ處女時代に對してさう深い感慨を持ちません。子供でも持ちましたらその頃のことの遠い世界に見えて、際立つた感想を抱くことが出来るかも知れませんが。

私の處女時代は二期に別けることが出来ると思ひます。上京前と上京後とそこに一つの線がひかれます私は二十二の年に出京しました。それまではほんの田舎娘で——尤も今だつて随分田舎者ですが——小學校を卒業すると普通の町家の娘なみに前掛けをしめて黒い襟のかつた半纏を着てお針に通つて居ました。一四か五の時に、弦齋の「小猫」つていふ小説を讀んでから、非常に小説が好きになつてしまひ、それがどうとう今のやうなことになつてしまつたのですが、十八十九時分まではそれでも自分は店屋のおかみさんにならなければならぬものと思ひ込ん

で居ました。といふのは、商ひをして居る姉夫婦には一人も子供がありませんでしたから、自然私が婿養子でもしなければならなかつたのです。

それが一年く慰みの筆がほんもになつて來て、どうかして小説家になりたいなど、潜越な望みを抱くやうになりました、今度はそれが嵩じて東京に出たくなる。家では初めどうしても許して呉れなかつたのでとうく家出を覺悟しました。それが二十一の時だつたらうと思ひます着替への着物なぞを一枚二枚と友達のところに運んだのを、とうく母に見つかつて倉の二階に招ばれ、散々口説いて泣かされました。それで遂々未遂で終りましたが、其時分は怖しく積極的な氣分になつて居たやうに思ひます。あの時分の意氣がいつまでも續かうものなら、どんなことだつて出来る譯なんですけれどもね。しかしそんな風に家を逃れ出るといふやうなことは、私にしては藝術といふ目的があつたからなのだけれど、單にそればかりのものではな

く、女が年頃になつて来ると、親の家といふものがどつかかう窮屈なものになつて来るのではないかと思はれます。一人娘とか總領にでも生れたなら格別、嫂とか義兄とかいふやうなものが出来て来ると、もの心づいたものにはともすると感情を複雑にしたがる傾きが生じて来ます。日本の家族制度のやうに、總領が財産の全部とそれに附随した権利を受ついで、弟妹はその保護を受けるといふやうになつて居ると、女などには殊に窮屈で仕様がありません。相當なお金をかけて嫁入り仕度を整へて貰ふといふことにも遠慮を持たなければなりません。それやこれやで、丁度食客——それにしては随分我儘な贅澤な食客だけれど——でももあるやうな感じを抱きます。それが受動的に動く女ですと、親や兄弟の見立て、計らつて呉れるまゝにお嫁にも行くでせうけれど、少しでも自覺した女それでなくとも周囲の人は、達がその一身上に就いてかまつて呉れなかつた場合に居る女などには、どうかして自分の家——それは安心

とか落着きとかいふやうな意味を多分に含んで居ます——を見付けたいと望みもし多少の努力も試みます。その時分の煩悶といふやうなものはそれが思ふやうにならなかつた時の精神状態ではないのでせうか。無論自分の家といふものが、何處にあるか如何いふものであるか、解つて居たなら、それに行く道を阻まれない以上煩悶もないのでせうけれど、どんなものでも目的のある人はこんな時に幸ひだと思ひます。目的が即ち家になりやすいもの。私はとう／＼許しを受けて出京しました。その時の私には藝術が自分の家でもあれば宗教でもありました。一口にいへばその爲めには戀も捨てました。四十二年の五月から十一月まで、田山先生の玄關に御厄介になつて居ました。十一月の末から永代美知代さんと初めて代々木の奥に小さな家を持つたので、その時の開放されたやうな嬉しい氣分を今になつても忘れることが出来ません。その後頃の私は、獨斷家で、精力家でも丸々と肥つてましたし、丁度脇

道を知らない猪のやうでしたと今になつて可笑しく思ひます。東京に出てからの處女時代も二期に分れます。代々木の家を解散してからの半年ばかりは、あつちに一月此方に二月といふ風に、空らない生活をして居ましたが、そのうちに一寸した職業が出来たので、その都合から下谷の西町に素人下宿をしました。その邊から面白い、さうして苦しい生活が初るので、男性的な私にもいくらか女らしい潤ひの出て来たのも其頃でした。藝術上の自分の力を疑つて惰氣たり、焦慮つたり、思ふやうにならないので自棄氣味になつたり、理性の勝つた私にもだんだん感情的なところが出来ました。今ではこんなにけろりとして居ますが、結婚つていふことにも小つぴどく苛められました。全く處女にとつて結婚といふことは迷宮だと思ひます。考へても／＼考へ切れません。いくら想像しても想像がつきません。そして私はどうしても結婚つていふことにいゝ結果を豫想することは出来ませんでした。それでも煩悶に煩

悶を重ねた揚句、とう／＼結婚する氣になつてからは、非常に心持が樂になりました。しかしそこまで心を運ぶのは大英斷が必要なのでした。これで私の處女時代の筋書は終りました。今になつて見ますと、あの時分結婚や結婚後に就いて考へたり想像してたことが、まるで見當違ひなことばかりで可笑しいやうなんです。苦勞つていふ苦勞も、人妻になつてからでなければほんとに味は、れないやうな氣がします。どんなに苦勞をして居た積りでも、今から見ればどつか暢氣な間の抜けたところがありましたものね。あの時分は。處女が體を守るといふことは本能的だと私は思ひます。そして處女であるといふことが若い女に取つてのたゞ一つの身上ではないのでせうか。それがだん／＼年を取つて来ると、好奇心が非常な勢ひをもつて湧いてくるし、かた／＼處女であるといふことが絶対の矜りにはならなくなつてまゐります。それは周囲が、殊に男達が、さういふ年の多い處女に對して、いろ／＼な嘲りや擲擲を浴び

せるからで、尤も紫の色の褪めた袴をはいて、いやに顔色のわるい分別顔の女なぞに出會ふと、女でも私は思はずぞつとしてあゝだけはなりたくないとよくさう思ひました。同性だけにその思ひが殊に痛いやうで厭でなりませんでした。

【入力者注】  
底本は総ルビですが、一部のみ残しました。

底本…サンデー

大正二(1913)年七月六日

入力…小林 徹

公開…令和六年七月二十七日

リンク…[作品年譜](#)へ戻る

處女時代は女にとつて人世の春のやうなものではないでせうか。華かなうちにもどこか哀愁を含んで居てもそれも秋のやうな冷たい感じのものではなく、どこやらふつくらとして居ります。その春が逝くといふことが、どんなに／＼惜しまれたでせう！その感じだけは、日記にでも依らなければ忘れ氣味になつて居るその時分の心持ちに、際だつて残つて居ります。